様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２５日現在

機関番号：　３２６８６
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０７００５１５
研究課題名（和文）スポーツを中心とした沿岸域共生メカニズムの解明：スポーツ地理学の構築へ向けて
研究課題名（英文）Symbiotic relations between marine sport activities in coastal area: toward the development of the sport geography
研究代表者
佐藤　大祐　（SATO DAISUKE）
立教大学・観光学部・准教授
研究者番号：２０４０５６１６

研究成果の概要（和文）：本研究はサンディエゴ大都市圏におけるマリーナの立地と，ヨットやモーターボートなどの沿岸域利用を解明し，調和のとれた空間利用の創出に寄与することを目的とした。伝統あるクラブでは湾口部に広がる高級住宅地から高額所得者層が，湾奥部に位置するマリーナでは市南部から中産階級が利用するという棲み分けがみられた。また都心部のレクリエーション行動の分析から,マリーナなどを活用した都心部再開発の有効性も検証できた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the location of marinas and the coastal uses in San Diego metropolitan area, toward to promote well-balanced development around the coastal area. We found the following compartment: high income bracket residing in upscale areas near the mouth of the San Diego Bay uses a traditional yacht club, and middle class residing in inland areas of the city uses a marina located at closed-off section of the bay. Analyzing the visitors' recreational behaviors in the downtown, we proved the effectiveness of downtown redevelopment utilizing marinas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	2,200000	660,000	2,860,000

研究分野：人文地理学
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 ，スポーツ科学
キーワード：地理学，沿岸域，スポーツ，マリーナ，集客圏，客層

１．研究開始当初の背景

都市部においては工業や運輸業などの，周辺部においては漁業や水産加工業などの生産活動によって高密度に利用されてきた場所である。しかし近年，ヨットやモーターボートなどが増加し，日本のプレジャーボート登録隻数は 2005 年に 35 万隻を超えている。このようなプレジャーボートの増大は，漁業や船舶航路および臨海工場などとの間に軋轢を生んでいる。その一方で，都市部では造船所などの工場が，周辺部では漁港がマリーナに転用される現象がみられる。このように，日本の沿岸域においては，生産活動とスポーツ行動のコンフリクトと共に，生産活動から余暇活動への遷移を観察することができる。オリンピック開催に伴う社会経済的インパクトに代表されるように，現代のスポーツは地域変化にとってきわめて重要な原動力である。このような巨大スポーツイベントのみならず，長野県の菅平高原においてはラグビ

ーが，千葉県の白子町においてはテニスが原動力となり，いずれの地域もスポーツ合宿地に変貌した。全国各地に形成されたスキー観光地も含めて，スポーツが地域を変貌させた例は枚挙にいとまがない。

このような地域においては，スポーツを媒介として，地域を構成する人間，産業，自然などの間にみられる相互作用の存在に注目する必要がある。例えば，千葉県の白子町では，農漁業の低生産性とそれを補うかたちで導入された海水浴民宿の伸び悩みが，民宿世帯がテニスコートを造成する動機となった。私が考えるスポーツ地理学とはまさに，このようスポーツが行われる「場所」と場所を構成する要素間の「関係性」を解明する学問分野である。その最終的な目的は，構成要素間の利用調整や地域計画を通して，研究成果を社会還元することにある。

沿岸域は，都市部においては工業や運輸業などの，周辺部においては漁業や水産加工業などの生産活動によって高密度に利用されてきた場所である。しかし近年，ヨットやモーターボートなどが増加し，日本のプレジャーボート登録隻数は 2005 年に 35 万隻を超えている。このようなプレジャーボートの増大は，漁業や船舶航路および臨海工場などとの間に軋轢を生んでいる。その一方で，都市部では造船所などの工場が，周辺部では漁港がマリーナに転用される現象がみられる。このように，日本の沿岸域においては，生産活動とスポーツ行動のコンフリクトと共に，生産活動から余暇活動への遷移を観察することができる。

２．研究の目的

本研究はスポーツ地理学を開く端緒として，サンディエゴ大都市圏におけるマリーナの立地と，ヨットやモーターボートを中心とした沿岸域利用を解明し，調和のとれた空間利用の創出に寄与することを目的とした。研究代表者はこれまで，東京大都市圏において明治期から現在までの社会的背景の変化に注目しながら，ヨットやモーターボートというスポーツがいつどのような社会階層に普及し，それらの活動拠点となるマリーナがいかにして展開してきたのかを解明してきた。これらの研究蓄積と比較しながら，沿岸域におけるスポーツ行動や生産活動などの共生メカニズムを，自然環境・産業構造転換・社会階層・行動空間の諸側面から総合的に解明することを目指した。

３．研究の方法

本研究は，スポーツがある地域の中でどのように成立しているのかを実証的に解明するため，サンディエゴ大都市圏におけるヨットやモーターボートと自然環境や諸産業との関わり，所有者の社会階層や行動についての実態調査を行う。

対象地域内のマリーナを規模や施設などを基準に分類し，その分布特性から地域類型を設定する。各地域類型を代表するマリーナを対象に，その開発過程や利用者（ヨット・モーターボート所有者）の社会階層および行動海域などを分析する。これらの結果を社会的背景の変化を踏まえて考察することによって，沿岸域におけるスポーツ行動と生産活動の共生メカニズムを解明する。

さらに，このような共生メカニズムを日本の沿岸域における利用調整や地域計画へ還元することを視野に，実証研究に基づいたスポーツ地理学の理論的構築を目指す。

４．研究成果

(1) マリーナの分布特性と類型

まず，サンディエゴ大都市圏の全てのマリーナを対象に，下記の項目を調査した。

- ・マリーナの規模（占有面積と保管艇の隻数）（図 2）
- ・保管艇の種類
- ・クラブハウスやレストランなどの施設構成（図 4）
- ・マリーナ開設者や開設の経緯など(Fig 2)。

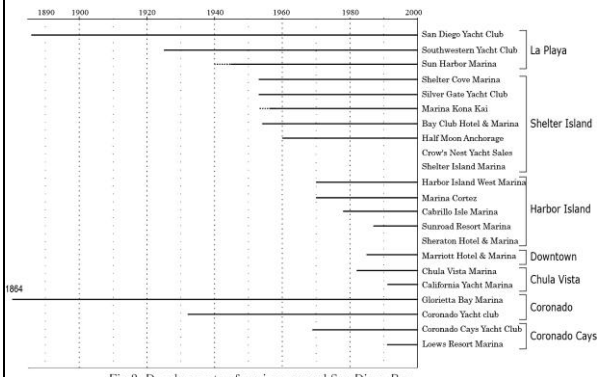

Fig 2. Developments of marinas around San Diego Bay.
Source: The Port of San Diego, and field survey.

図 4 は，このうち施設構成をもとにマリーナを４つに分類し，地図化したものである。最もシンプルな基本型は，係留桟橋とそれに付属する給水・給電などの保管施設に，トイレやシャワーなどを加えたものであり，保管機能に特化したものと言える。基本型のマリーナは 3 ヵ所にあり，シェルターアイランドの 2 ヵ所はそれぞれシェルターアイランドホテルとボート整備工場が経営しているものである。このホテルは隣接した 2 ヵ所のマリーナを経営し，それぞれホテル施設を無料または安価に利用できるものもあるが，利用できないものはその分だけ保管料を割安にしており，ハーフムーンアンカレッジの場合，全長 30 フィート（10m）の平均的なボートの

保管料が年間 3,312 ドルと安価である。シェルターアイランドには整備工場が～ヵ所にあり，サンディエゴ地区全体にサービスを提供している。このように，他種類のマリーナの存在と，それをバックアップする整備工場などボート関連産業の存在が，シェルターアイランドの特徴であろう。

商業型は，基本型の施設に賃貸の店舗・事務所を加えたものである。商業型 7 ヵ所のうちハーバーアイランドに 4 ヵ所が集中している。ハーバーアイランドは 1961 年に海軍が空母基地までの水路の浚渫土砂を埋め立てた所で，1968 年からサンディエゴ統合港湾管理委員会によって整備され，ホテルなどに賃貸された)。このようなマリーナと抱き合わ

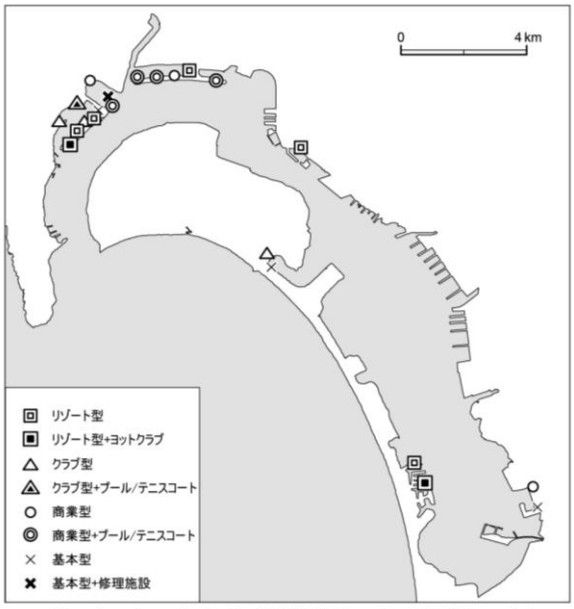

図4 サンディエゴにおける施設構成別のマリーナ類型(2008年)
(現地調査による)

せの開発を実施したのは，シェルターアイランドでの成功があったものと考えられる。とくにハーバーアイランドは空港や都心にも近いため，ホテルに加えて商業施設の適地として開発された。開発業者がマリーナと，その事務所棟に付属して 1 階から 4 階？建ての商業棟を建設している場合が多い。

クラブ型は，住民の非営利組織であるヨットクラブが運営するマリーナである。したがって，これらは歴史のある地区を後背地に持つラ・プラヤとシェルターアイランド，およびコロナドに立地している。レストランやバー，シャワールームなどが配置されたクラブハウスを中心に，係留施設とスポーツ施設などが付帯する。サンディエゴでは，サンディエゴヨットクラブが 1886 年設立と最も歴史のあるクラブであり，規模も 737 隻と研究対象の中で第 1 に大きく，施設も 25m プールやテニスコート 2 面，サウナなどがあって充実している。

リゾート型は，宿泊施設とレストラン，プールやテニスコートなどのスポーツ施設を備えたものである。宿泊施設には，ホテルまたは個人別荘が含まれる。シェルターアイランドでは，ボーテル（botel）と呼ばれる施設が開発された。ボート利用者が泊まるホテルのことで，係留桟橋を備えている。シェルターアイランドでは，ボーテルが開発されたが，それらは宿泊者以外の一般のプレジャーボートや漁船を収容できるように，部屋数の 2 倍の係留桟橋を備えるよう義務付けられた。桟橋には給水・給電施設が備わり，快適にボートないで宿泊できる。そのため，ボーテルとしての需要は開発当初からきわめて少なく，現在もホテルに宿泊するボート所有者は，イベント時を除くとごく少数である。

他の 3 つの項目も合わせて分析した結果，湾口部のマリーナは大規模で高いヨット率，リゾート施設に特徴がある。ラ・プラヤはその中核に位置付けられ，シェルターアイランドはマリーナ付帯のホテルを中心にリゾート的特色を有していると言えよう。コロナドはよりリゾートに特化している。ダウンタウンもマリーナ付帯のホテルがあるが，これはコンベンションホールを核としたウォーターフロント開発である。一方，チュラビスタは保管機能に特化したマリーナが多く，利用者層も他のマリーナと比較して中産階級が中心だと考えられる。

(2) サンディエゴ沿岸域の地域類型

表 3 は，これらの項目を指標としたマリーナの分布状況に，臨海工業地帯や漁業基地などの地域性を加味して設定した，地域類型を示したものである。マリンレジャー複合地域は，湾口部にあり，マリーナ数が 15 ヶ所，7,579 隻中 4,922 隻（64.9%）を占める，サンディエゴ大都市圏の中でもボートレジャーの中心地である。わけてもシェルターアイランドは，歴史のあるサンディエゴヨットクラブや，3 ヶ所のボーテル，プレジャーボート専用の修理工場など，相互補完し合える多様なマリーナがあり，まさにプレジャーボート複合地域の中核地区である。

表3 マリーナの特性からみたサンディエゴ沿岸域の地域類型

	開設時期 ～1940s	1950s ～70s	1980s ～90s	規模	ヨット率	施設類型	地域類型
La Playa	○			中－大	高	B－C	マリンレジャー複合地域
Shelter Isl.		○		小－中－大	中－高	F－B－C－R	
Harbor Isl.		○	○	小－ －大	低－中－高	B－ －R	
Coronado	○			小－中	中	C－R	リゾート地域
Coronado Cays		○	○	小－ －大	低－中	R	
Downtown			○	大	低	R	都心親水地域
Chula Vista			○	中－大	低－中	F－B	保管特化地域

リゾート地域は，コロナドとコロナドケイズである。どちらもマリーナはサンディエゴ

湾側に位置しているが，太平洋岸には砂浜の広がる海水浴場を控えている。マリーナはホテルやリゾートマンション，係留桟橋付きの別荘を備えている。

都心親水地域と保管特化地域は，漁業や工業などの産業地帯を再開発したり，埋め立てたりした点に特色がある。いずれの開発も漁業や工業の活動が鈍化したことが理由の一つであったことから，開設年が 1980 年代以降と新しい。また，湾奥に位置することから，保管艇にはモーターボートが多数を占める。都心親水地域は，マリーナがコンベンションセンターとホテル，周囲のオフィスビル，公園などと共に計画的に開発された所である。一方，保管特化地域は，サンディエゴ湾の最奥部にあり，規模は大きいものの施設は簡素である。これらのことから，保管特化地域におけるマリーナのボート所有者層は，中産階級を含む比較的広い社会階層であると予想される。

(3) マリーナの集客圏と客層

次に，港湾局による旧版地図や沿岸域の占有者リスト,住宅地図に相当する Sanborn Map などを入手して，サンディエゴ大都市圏の沿岸域利用の変化について調べた。さらに，設定した地域類型から代表性のあるマリーナを選定し，顧客リストを入手して，客層や集客圏，レクリエーション行動について分析を進めた。

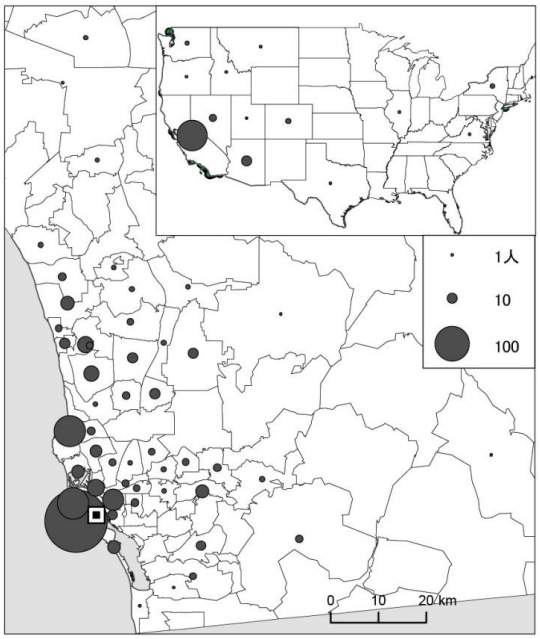

図5 サンディエゴヨットクラブ会員の居住地分布(2008年)
(会員名簿により作成)

その結果，伝統あるサンディエゴヨットクラブ会員の居住地はサンディエゴ湾北部の太平洋岸に集中していることが分かる (図 5)。この地域は，海岸線に並行して小高い丘が連なっており，そこには La Playa や La Jolla（ラホヤ）などの高級住宅地が広がっている。古くは海軍将校や，近年ではサンディエゴに本拠を置くハイテク産業の経営者などが居を構えている。これらのことからサンディエゴヨットクラブには，社会的権威を持つ階層や富豪などの階層が多く存在すると考えられる。

湾奥部に位置するカリフォルニアヨットマリーナでは，ヒスパニックも多く居住するサンディエゴ南部から中産階級が利用している (図 6)。カリフォルニアヨットマリーナ利用者には，白人中間層やヒスパニックの中でも成功を収めつつある者が多く含まれると考えられる。また，アリゾナ州やネバダ州などの内陸部にも多くの利用者がみられる。サンディエゴヨットクラブのようなある程度閉鎖的なクラブではないために，遠方からの利用者も気軽に利用できるのであろう。

このように，太平洋に近くマイルドな気候で高級住宅地が広がる湾口部と，工業や運輸施設の集積が見られる湾奥部に，それぞれ高額所得者層と中産階級によって利用されるマリーナが立地するという沿岸域利用の棲み分けがみられた。こうした現象は東京大都市圏でも見られたことである。

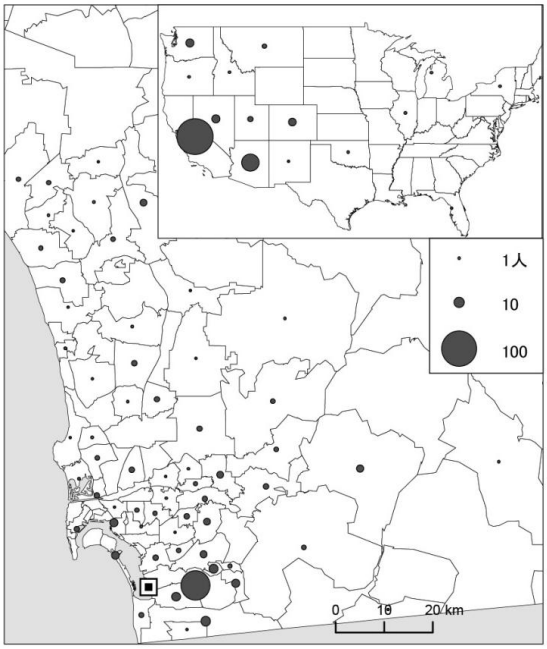

図6 カリフォルニアヨットマリーナ(チュラ・ビスタ市)利用者の居住地分布(2008年)
(会員名簿により作成)

また，マリンスポーツを含む観光都市としてのサンディエゴ都心部のレクリエーション行動の分析から，マリーナの親水景観を活かしたウォーターフロントにおいて歴史建築や競技場，コンベンションセンターなどを活用した都心部再開発の有効性も検証できた。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
佐藤大祐，モンスーンアジアにおけるヨットの伝播と受容，交流文化，2010，査読無，9巻，32-37 頁

〔学会発表〕（計１件）
佐藤大祐，地理学における文化層序－雲仙ヒルステーション研究の紹介と地理教育への援用試案－，佐賀県高等学校教育研究会地歴・公民部地理部会研修会，2008 年 6 月 20 日，佐賀市

〔図書〕（計３件）
佐藤大祐，スポーツを中心とした沿岸域共生メカニズムの解明：スポーツ地理学の構築へ向けて　科研費研究成果報告書，藤原印刷，2011，37 頁

佐藤大祐他，ナカニシヤ出版，レジャーの空間－諸相とアプローチ，2009，270 頁

佐藤大祐，朝倉書店，日本の地誌 5　首都圏 I，2009，143-150 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　大祐（SATO DAISUKE）
立教大学・観光学部・准教授
研究者番号：２０４０５６１６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし